

ひたちなか 埋文だより

34



イノシシの骨格を掘り出す 2009年12月25日に埋めて11箇月、「ふるさと考古学⑨骨の考古学」の講座で、骨だけになったイノシシを砂の中から掘り出しました。骨を傷つけないために金属の移植ごてでは使わず、指先で骨を探り当てたら竹串と刷毛で砂を落とします。漏れがないように、掘り上げた砂を篩^{ふる}って細かな骨も探しました。洗浄して乾燥させた骨格は、貝塚から出土した動物の骨を研究するための標本として活用されることとなります。砂場には現在、タヌキが埋められています。 (2010.11.28)

CONTENTS

第8回企画展 古代茨城の鉄生産／公開講座「ひたちなか市の考古学」第4回

遺跡を見つけた少年たち (安島 功)

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第6回 茨城県史編纂事業が始まった (川崎純徳)

展示資料紹介 柳沢大田房貝塚出土の土冠 (横倉要次)

展示資料紹介 三反田蜷塚貝塚の大型石棒 (鈴木素行)

横穴墓を歩く⑤ 崎浜横穴墓群 (千葉隆司)

ひたちなか市内の発掘調査 2010

1ケース・ミュージアム 19 いただきもの。

ひたちなか市の遺跡⑦ 勝田三中学区編

歴史の小窓⑥ 古代仏教の開花

虎塚古墳花便り⑥ ソメイヨシノ

ほか

第8回企画展

古代茨城の鉄生産

2011年1月23日(日)～5月8日(日)



この展示では、ひたちなか市内にあります後谷津製鉄遺跡の価値を広く知っていただくとともに、茨城県内の製鉄遺跡についての理解を深めるため、県内の製鉄遺跡から出土した遺物を展示し解説いたしました。

謎の多い製鉄遺跡研究 製鉄遺跡でつくられた鉄は古代では大変貴重なため運び出されてほとんど遺跡には残りません。また製鉄炉は操業が終わるごとに壊して炉内の鉄を取り出すために、製鉄炉が良い状態で残されることはほとんどありません。また製鉄遺跡は住居跡のような生活の場ではないので、土器が残されることも稀であり、出土土器から年代を決めることも難しい場合が多いのです。このように古代の製鉄研究は、製鉄炉の痕跡や、炉壁・鉄滓といった廃棄物を詳細に観察し、そこから考えていくしかなく、年代が不明なこともあって、謎の多い研究分野となっています。そしてその謎を解くべく、考古学のほか、金属学や民俗学、歴史学などの研究者が協力しながら学際的な研究環境をつくってきており、そこが鉄研究の面白さにもなっています。

ひたちなか市後谷津製鉄遺跡 市内唯一の製鉄遺跡である後谷津製鉄遺跡は、現在のところ茨城県最古の製鉄遺跡になる可能性があります。年代は八世紀前半頃の製鉄炉とされています。古代の製鉄炉は箱形炉と壱形炉に分けられますが、後谷津遺跡の製鉄炉は箱形炉です。後

この展示では、ひたちなか市内にあります後谷津製鉄遺跡の価値を広く知っていただくとともに、茨城県内の製鉄遺跡についての理解を深めるため、県内の製鉄遺跡から出土した遺物を展示し解説いたしました。

謎の多い製鉄遺跡研究 製鉄遺跡でつくられた鉄は古代では大変貴重なため運び出されてほとんど遺跡には残りません。また製鉄炉は操業が終わるごとに壊して炉内の鉄を取り出すために、製鉄炉が良い状態で残されることはほとんどありません。また製鉄遺跡は住居跡のような生活の場ではないので、土器が残されることも稀であり、出土土器から年代を決めることも難しい場合が多いのです。このように古代の製鉄研究は、製鉄炉の痕跡や、炉壁・鉄滓といった廃棄物を詳細に観察し、そこから考えていくしかなく、年代が不明なこともあって、謎の多い研究分野となっています。そしてその謎を解くべく、考古学のほか、金属学や民俗学、歴史学などの研究者が協力しながら学際的な研究環境をつくってきており、そこが鉄研究の面白さにもなっています。

ひたちなか市後谷津製鉄遺跡 市内唯一の製鉄遺跡である後谷津製鉄遺跡は、現在のところ茨城県最古の製鉄遺跡になる可能性があります。年代は八世紀前半頃の製鉄炉とされています。古代の製鉄炉は箱形炉と壱形炉に分けられますが、後谷津遺跡の製鉄炉は箱形炉です。後



後谷津遺跡製鉄遺構

後谷津遺跡の製鉄炉は、谷の西向き斜面を削り出した段の上に、等高線と平行に設置された横置き箱形炉で、炉の両側から鉄滓を排滓します。長さ1.8m、幅0.5mに赤く焼けた炉床の両側には排滓坑が掘られ、排滓坑から排滓溝が斜面下に向かい伸びています。出土土器がほとんどないために年代は不明ですが、製鉄遺構の特徴からみて8世紀前半頃の製鉄炉になる可能性があり、近くの原の寺瓦窯跡同様、水戸市に所在する那賀郡衛正倉院・正倉別院造作に伴う工房のひとつではないかと考えられます。



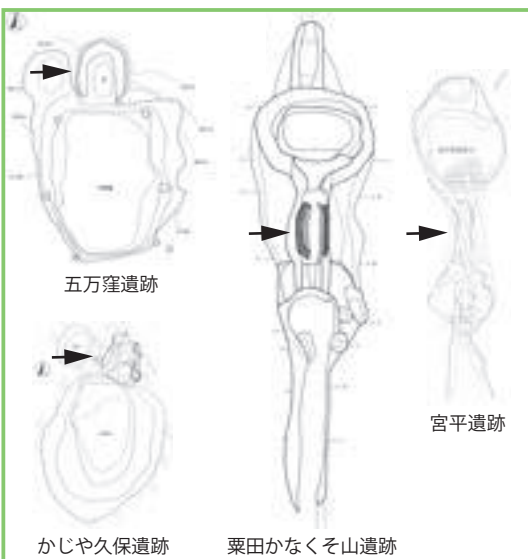
展示のようす

谷津遺跡の近くにある原の寺瓦窯跡と同じように、水戸市にある古代那賀郡の倉庫群をつくるための工房であったものと考えています。

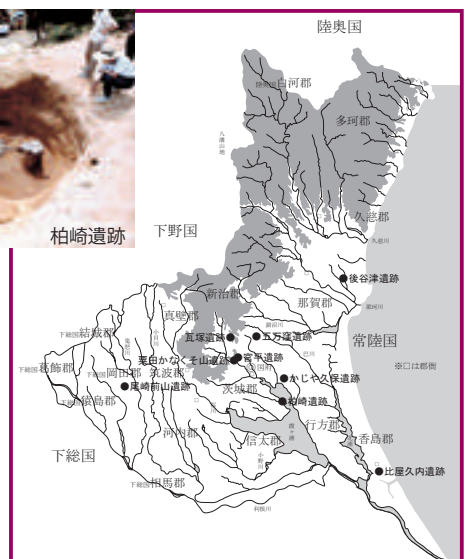
茨城県の製鉄遺跡 茨城県内ではまだ周知されていない製鉄遺跡も多く、製鉄遺跡の数ははっきりとわかつてはおりません。発掘調査が実施された製鉄遺跡は、まだ九遺跡ほどです。八世紀の箱形炉が五遺跡（後谷津・栗田・なくそ山・宮平・柏崎・尾崎前山遺跡）、八世紀後半から十一世紀の竪形炉が四遺跡（瓦塚・五万窪・かじや久保・比屋久内遺跡）が調査されています。

県内の製鉄遺跡は、奈良時代前半に、郡の寺院や官衙造営に伴い開始されるのだろうと思えます。奈良時代の中頃には国府周辺の粟田かなくそ山・宮平・柏崎遺跡で、「野路小野山型」製鉄炉という近江国の先進的な箱形炉が操業します。これは国衙や国分寺を造営するために、国司によって導入された技術だったでしょう。平安時代後期には、五万窪遺跡やかじや久保遺跡のように掘り込みが浅く、炉壁に長石・石英類の礫を多量に混ぜた特徴的な竪形炉が使用されます。そして中世に入ると製鉄遺跡は県内ではみられなくなります。

生産した鉄の用途 古代に製鉄遺跡が形成された時期は、寺院や官衙が造られた時期と重なっています。おそらく古代の鉄づくりの目的は、寺院や役所の建設に関わっていたようです。



茨城県の製鉄遺構（矢印が炉の位置，1/240）



茨城県の製鉄遺跡



古代の鉄づくりは、砂鉄から粗鉄を生み出す「製鉄」と、粗鉄から製品を作り出す「鍛冶」に分けられます。製鉄炉は粘土で築き、木炭により砂鉄を溶かして鉄塊を生み出します。できた鉄塊は鍛冶炉で熱して叩いてまとめ、粗鉄にします。おそらくできた粗鉄の多くが、釘や鉄鍔のような大量消耗品に造られたことでしょう。一部の良質な鉄は刀になったかもしれません。

古代の寺院跡を発掘調査すると、大型の釘が出土することがあります。千葉県原市に所在する上総国分寺跡の調査では多量の釘が出土しています。寺院や官衙の建物を建てるためには大量の釘が必要であり、その素材鉄を得ることが、古代の鉄づくりの大きな目的であったのではないかと考えています。
(佐々木義則)



講座終了後のギャラリートーク

月/日	演題	講師
2/12 (土)	製鉄遺跡研究の現状について	製鉄遺跡研究会 穴澤 義功氏
2/19 (土)	近江国の製鉄遺跡	滋賀県立安土城考古博物館 大道 和人氏
2/26 (土)	茨城の古代製鉄遺跡	(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 佐々木 義則
3/5 (土)	鉄製品の分析からみた 古代鉄生産	東北大学大学院 関 博充氏

公開講座「ひたちなか市の考古学」第四回
古代の鉄生産

二〇一一年二月十二日から三月五日の毎週土曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学」第四回「古代の鉄生産」を開催しました。三名の研究者をお招きし、古代日本の鉄生産研究についてお話しいただきました。講座を通して、市内の後谷津製鉄遺跡が、県内最古の製鉄遺跡であることが明らかとなりました。なお、今回の講座は、後日、記録集を刊行する予定です。



東北大学大学院
関 博充 氏

「鉄の産地推定ができないものかということ私を調べています。鉄器に含まれる銅、ニッケル、コバルトという3つの元素に着目しています。この3元素は、鉄がさびても鉄中に残る性質があるので、製鉄原料の組成比を、ある程度示す可能性があります。」



滋賀県立安土城考古博物館
大道 和人 氏

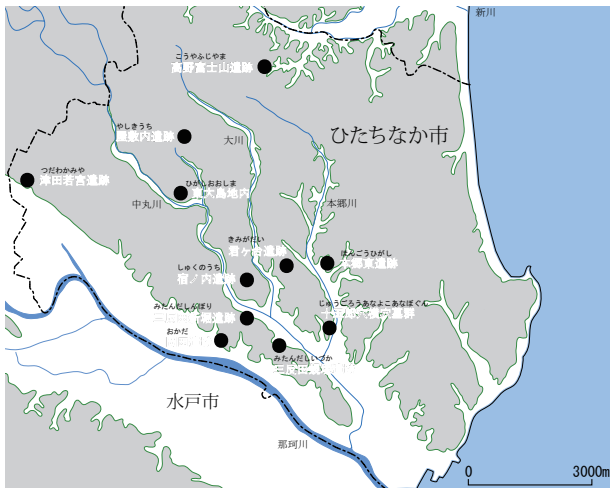
「近江には8世紀中頃に、野路小野山遺跡という国内最大規模の製鉄遺跡があります。そう言っても信じてもらえないことが多いのですが、これは間違いなく日本でもっとも大きな製鉄遺跡であると理解しています。」



製鉄遺跡研究会
穴澤 義功 氏

「日本の製鉄技術は、母親が中国ですね。それが朝鮮半島を経て、日本へ入って、だんだん改良されていったという経緯があります。中国の製鉄技術だけなのかというと、どうも東南アジアとかインドの製鉄技術がミックスされていると現在では考えられるようになっていきます。」

ひたちなか市内の発掘調査 2010



二〇一〇年度は、ひたちなか市内においては市内遺跡調査のほか、十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査や、茨城県教育財団による宮後遺跡・部田野西原遺跡の発掘調査がありました。市内遺跡調査では、本郷東遺跡で古墳時代後期の住居跡が調査され、須恵器座や土師器甑などの遺物が出土しました。また高野富士山遺跡では、平安時代の住居跡が調査され、墨書土器が出土しました。十五郎穴横穴墓群の範囲確認調査は遺跡北部を中心に試掘調査が実施され、遺跡解明へ向けて少しずつ歩み始めました。

(佐々木義則)

2010 (平成 22) 年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	月	種別	調査内容
1	三反田蛭塚遺跡 <small>みたんだしづか</small>	2次	三反田	4月	試掘	住居跡1基(時期不明)、溝1条、土坑1基を確認。縄文土器・土師器が出土。
2	本郷東遺跡 <small>ほんごうひがし</small>	1次	馬渡	5月	試掘	住居跡6基(古墳)、土坑1基を確認。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土。
3	本郷東遺跡 <small>ほんごうひがし</small>	2次	馬渡	6月	試掘	住居跡2基(弥生1, 時期不明1)、ピット26基を確認。弥生土器・土師器が出土。
4	本郷東遺跡 <small>ほんごうひがし</small>	3次	馬渡	6月	本調査	住居跡1基(古墳後期)を調査。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器が出土。
5	高野富士山遺跡 <small>こうやふじやま</small>	5次	高野	7月	試掘	住居跡3基(平安)、土坑2基を確認。土師器・須恵器・陶器が出土。
6	君ヶ台遺跡 <small>きみがだい</small>	9次	中根	8月	試掘	溝1条、土坑2基を確認。縄文土器・土師器・須恵器が出土。
7	高野富士山遺跡 <small>こうやふじやま</small>	6次	高野	8月	本調査	住居跡1基(平安)、ピット3基を調査。土師器・須恵器・砥石が出土。
8	三反田新堀遺跡 <small>みたんだしんぼり</small>	14次	三反田	8月	試掘	溝跡2条、土坑1基を確認。遺物なし。
9	宿ノ内遺跡 <small>しゆくのうち</small>	3次	中根	10月	試掘	遺構・遺物なし
10	三反田新堀遺跡 <small>みたんだしんぼり</small>	15次	三反田	11月	試掘	住居跡1基(古墳)、溝2条を確認。縄文土器・土師器・須恵器が出土。
11	屋敷内遺跡 <small>やしきうち</small>	2次	東石川	12月	試掘	遺構・遺物なし
12	津田若宮遺跡 <small>つたわかみや</small>	8次	津田	2月	試掘	ピット8基を確認。遺物なし。
13	岡田遺跡 <small>おかだ</small>	19次	三反田	2月	試掘	住居跡6基(弥生後期4, 古墳前期1, 時期不明1)、縄文早期の包含層を確認。
14	東大島地内 <small>ひがしおおしま</small>	一	東大島	3月	試掘	盛土状遺構1基、溝3条、土坑2基を確認。かわらけ等が出土。

歴史の小窓 その六

古代仏教の開花



ひたちなか市原の寺瓦窯跡という奈良時代の瓦窯跡からこの蓮華紋軒丸瓦は出土しました。このように蓮の花を浮き彫りにした瓦によって、奈良時代寺院の軒

先は飾られていたのです。私が考古学を学び始めた頃、その蓮華紋の意味について、夜が白々と明けるまで語ってくれた先生がおりました。先生は『大智度論』を引き合いに出しながら、法隆寺金堂釈迦三尊像光背文様に込められた次のような意味についてお教えくださったのです。「仏をたたえて集まってくる者は、仏の救済によって蓮華をとおして飛天に生まれ変わります、その飛天が堂内に満ちて、天蓋や蓮華紋などで堂内を飾り立てて仏を供養することにも、そのように堂内に充滿した功德が堂外へと現れて軒先を飾り立てたものが蓮華紋軒丸瓦であるのです。」驚くべきことに古代寺院の金堂全体が、大乘仏教の世界の表現だったのです。先生のお話は、学問の奥深さに感動した、私にとつて忘れることのできない幸福な数時間でした。

(佐々木義則)

参考文献 長谷川誠「法隆寺金堂釈迦三尊像の荘厳意匠について」

『駒沢女子大学研究紀要』創刊号、一九九四

みやうしろ へ た の にしはら
宮後・部田野西原遺跡の発掘調査 宮後・部

田野西原遺跡は、ひたちなか市の部田野地区に所在する、縄文時代から平安時代にかけての遺跡です。今回は、国道 245 号線の道路拡幅工事に伴い発掘調査を実施しました。

宮後遺跡は、1900 m²の面積から、住居跡 16 軒、掘立柱建物跡 10 棟、土坑 20 基、陥し穴 1 基、溝跡 4 条、道路跡 1 条、ピット群 1 か所を確認しました。集落は、弥生時代後期から平安時代にかけて形成されていました。古墳時代後期や奈良時代の住居跡は、大形のものが多く、幾度か建て替えた形跡が見られました。中には竈を併設している住居跡がありました。調査の結果、竈は大小 2 基あり、小さい方を後から付け足していることがわかりました。住居内に 2 か所の竈をもつものや、かけ口が縦・横に 2 つ並ぶものは調査例がありますが、併設しているものは、大変珍しい事例です。



併設した竈（宮後遺跡第 16 号住居跡）

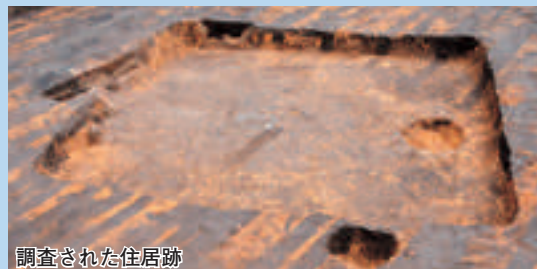
また、陥し穴は、埋められた土から縄文時代草創期のものと考えられます。遺物が出土しなかったのは残念でしたが、黒色土が発達する前に埋まったことから、上記の時期と推測しています。土は固く締まっており、色も見分けにくいため、調査時にはとても苦労しました。市内の西谷津遺跡にも、同時期の遺構があり、当時の生活の様子を解明する貴重な資料になると思います。

部田野西原遺跡では、35 m²の面積に平安時代の住居跡 1 軒を確認しました。宮後遺跡と同じように併設した竈が見つかりました。住居を建て替える時に新しい竈を作り、その後小さい竈を付け足していました。

当遺跡は、ひたちなか IC から那珂湊市街へ

こうや ふしやま
高野富士山遺跡の発掘調査 高野富士山

遺跡は、ひたちなか市北部の高野地区に所在する集落遺跡です。遺跡に住宅が建つことになったため発掘調査を実施し、平安時代（9 世紀中頃）の竪穴住居跡が 1 基調査されました。



調査された住居跡

住居跡は一辺 3.5 m の正方形で、深さは 30 cm でした。床面に柱の穴がなかったため、屋根をふきおろしただけの簡易な構造の屋根であったと思われます。床面は、竈前から出入り口にかけて硬く締まっています。出入り口部分に小さな穴が見つかりました。これは竪穴住居に出入りするための足掛け具の設置穴ではないかと考えられます。

住居跡からは、当時の食器である杯や高杯といった土器が出土しました。杯には墨で文字が三文字ほど書かれていましたが、今のところ判読でき



出土した須恵器杯

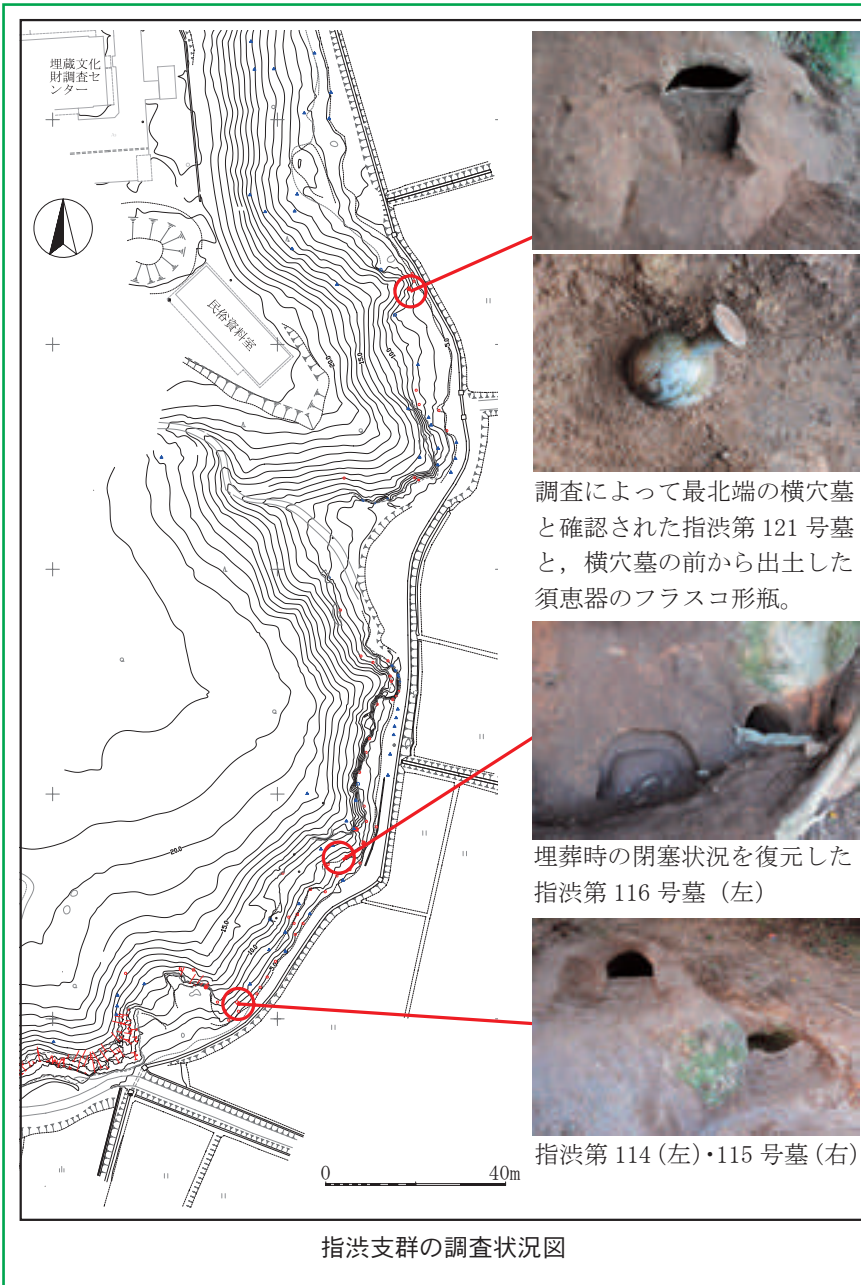
きていません。また、土鍋である土師器の甕、水や酒を入れたであろう須恵器の甕、鎌や小刀などを研ぐための凝灰岩製の砥石などが出土しています。

たぶんこの住居跡には、遺跡の南東部にある小さな谷に水田を営みながら暮らしていた、小さな家族が住んでいたのでしょう。

(佐々木義則)

向かう台地縁辺にあります。那珂川の河口付近のこの地では、昔から継続して集落が形成されており、生活をするには好条件が揃っていたものと考えられます。

(茨城県教育財団 市村俊英)



十五郎六横穴墓群試掘調査速報 十五郎六横穴墓群では、二〇〇七年度から測量調査が実施されています。二〇一〇年度からは、当横穴墓群の範囲と埋没している横穴墓の確認を目的として、試掘調査を実施しました。今年度の調査対象地区は、指洪支群と館出支群の一部です。調査の結果、埋没していた横穴墓一基を確認しました。また、二〇〇八年度の測量調査時に確認した指洪第一二二号墓が、当横穴墓群の最

北端の横穴墓であることが判明しました。当横穴墓の調査では、ほぼ完全な形の須恵器のフラスコ形瓶が出土しています。その他には、一九八〇年度に明治大学が調査をして埋め戻した、指洪第一一四〜一一九号墓を再確認しました。このうち第一一六号墓は、埋葬時の玄門部を石で閉塞した状態を復元して保存されています。調査は来年度以降も継続されます。

(稲田健二)

十五郎六の昔話

その一

十五郎六横穴墓群を案内すると、必ず質問されることがあります。それは「十五郎六という名前の由来は何ですか」というものです。その時はまず始めに「十五個の穴があるからではないですよ」と前置きしてから説明を始めます。「十五郎」とは、中根地区に伝わる昔話の登場人物「十郎・五郎」という二人の兄弟の略称です。「十郎・五郎」という人物は、鎌倉時代の父の仇討ちの物語である『曾我物語』に登場します。地元には伝わる物語では、十郎・五郎が仇討ちの後、追っ手を逃れて横穴墓に逃げ隠れていたと言うことから「十五郎六」と名前が付いたとされています。この「十郎・五郎」のお話は、江戸時代末の水戸藩の小宮山楓軒が記した文献に見られることから、約二〇〇年以上前から伝わる物語と考えられます。ちなみに、十五郎六の上に位置する虎塚古墳の「虎」は、十郎の妻である「虎御前」に由来します。このように地元には伝わる昔話からつけられた遺跡の名前は、全国でも珍しい事例です。

(稲田健二)



1940年発行の文献に掲載された十五郎六



ひたちなか市埋蔵文化財調査センターでは、分布調査や発掘調査で出土した資料の他に、個人や団体から寄贈、寄託された資料も保管し、展示や研究に活用しています。寄贈資料の代表的なものが「藤本弥城先史資料」「井上廣明コレクション」「佐藤次男考古学資料」です。この他にも、偶然の機会に採集した、あるいは所蔵していた資料を寄贈いただくことがあります。

今回の展示では、二〇〇七年から二〇一〇年までに寄贈いただいた資料の中から、一部を紹介しました。

市内の遺物 市内三ヶ所で採集された資料を紹介しました。道理山遺跡で採集された珠状耳飾りは、県内で二七例目、市内では六例目となる珍しい資料です。三反田蜆塚貝塚は、今でも畑の縁などに土器片がみられます。当センターの見学で話を聞いた三反田小学校の児童たちが採集したものです。高野地区で採集された石斧は、

遺跡地図に載っていない新たな遺跡がこの辺りに存在する可能性を示しています。

市外の遺物 北と南の石器を紹介しました。岩手県山口遺跡の石篋は、皮をなめすときに利用されたと考えられ、東北地方に多く見られる石器です。また、秋田や新潟では天然アスファルトが産出し、東北地方では接着剤などとして使用されていた例があります。展示の石鏃にもアスファルトとみられる痕があります。鹿兒島県田之脇遺跡で採集された資料は、遺跡の時期から弥生時代の磨製石斧だと考えられます。

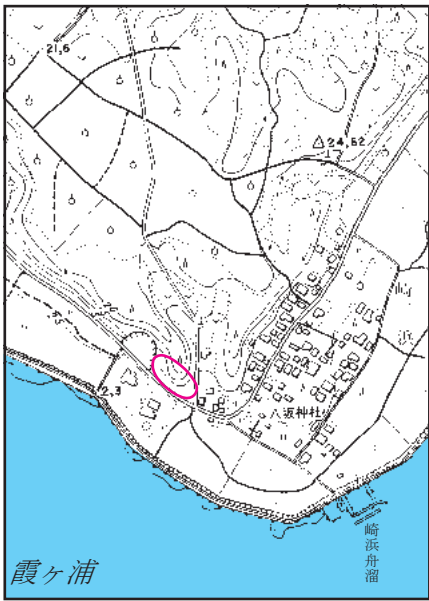
岩石標本 珪化木と神津島産黒曜石の二つの岩石標本を紹介しました。石器の材料となるこれらは、出土した石器を理解する参考資料となります。武田遺跡群からは、珪化木・神津島産黒曜石を材料とする旧石器時代の石器が出土しています。

(菊池順子)



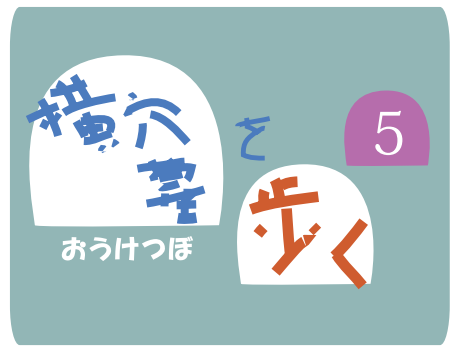
十五郎穴横穴墓群の「心霊写真」

(1978年度調査時撮影)



霞ヶ浦
崎浜横穴墓群と崎浜舟溜 (S=1/7000)

霞ヶ浦は、茨城県を代表する豊かな自然環境を保持する湖です。沿岸には様々な歴史が刻まれ、各種遺跡が現代にその様子を伝えていきます。今から約十三万年〜七万年前、地球上は比較的暖かい時代で、霞ヶ浦を含め関東地方には大きな内湾が広がっていました。その内湾の入り江には、干潟が形成され、そうした場所を見た



茨城県かすみがうら市
さきはま
崎浜横穴墓群

千葉隆司

(かすみがうら市郷土資料館)



崎浜横穴墓群

ちの絶好の住処となつていきます。その貝にはカキがおり、群集して生息していた場所の一つに、かすみがうら市加茂字崎浜の周辺があります。そのカ

キが時を経て化石となった姿が県道一一八号線沿いの断崖にみられます。

このカキ殻化石層は、後の古墳時代に墓所とされました。それが、崎浜横穴墓群です。崎浜横穴墓群は、カキ殻層及び周囲の砂層を掘りぬき、霞ヶ浦に向けて開口しています。明治二十八年には、小室龍之助によって『東京人類学雑誌』一〇六号「常陸国霞浦沿岸付近ニ於ケル古跡」に紹介され、広く知られるようになりました。その当時に確認した様子の一部を記すと「・・・第四ハ最も完全ナルモノニシテ入口ハ高サ三尺幅二尺五寸屈身シテ入ル凡四尺ニシテ立ツヲ得而シテ底面ハ入口ヨリ七尺ニシテ六寸許リ高クナリ又三尺許ニシテ奥壁ニ達ス奥壁高

サ四尺其ノ上ヨリ算シテ高サ五尺許リノ穹隆天井アリ柵形ノ平ナル所アリテ其ノ幅三尺許リ奥ノ部分ハ左右ノ部分ヨリモ一段高シ全形ヲ概言スレバ恰モ第一ヲ深く土中ニ造リテ入口ヲ下ニ下シ屈折シテ出テタルガ如キモノナリ、・・・」とあり、このほかに大小四基の横穴墓を報告しています。現在は、県道拡張工事などによって新たに発見された横穴墓を含め十七基確認されています。崎浜横穴墓群は、小室が報告した第四の墓のように羨道と玄室の間に高い段差を設けた高壇式と呼ばれる構造で、玄室に設けられた棺床は、規模の大小により、数が一〜三と様々です。この構造から房総南部との関係も指摘されています。この構造から竹石健二一九六七「茨城県新治郡出島村所在崎浜横穴墓群について」『史叢』一一 日本大学史学会。

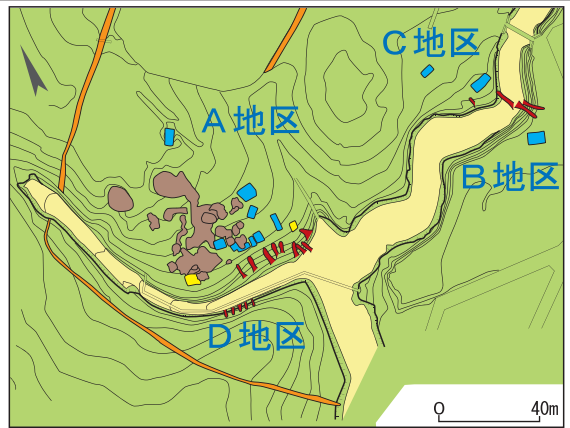
筆者は、崎浜横穴墓群の造営者について、その所在する地名及び地理的環境から古代氏族の賀茂(鴨)氏との関係を想定しています。賀茂氏が厨管理に携わることから各地の台所とも関係していたとされ、まさに霞ヶ浦の水産物や沿岸地域からの生産物などは絶好の対象物となつたことでしょう。

崎浜横穴墓群付近は、古くからの港がある環境で、そうした立地から水上交通による他地域との交流が多かつたところといえます。茨城県南部地域の横穴墓は、本横穴墓群と同市志戸崎横穴墓のみであることから重要な遺跡です。

中学区編)



長砂渚遺跡は、阿字ヶ浦中学区の沢田遺跡と同じ中世の塩づくりの遺跡です。2005年に発掘調査が実施され、釜屋跡2基、鹹水槽跡26基などが見つかりました。



馬渡埴輪製作遺跡は、粘土を採掘して、工房で埴輪を作り、乾燥させて窯で焼き上げるという、埴輪製作の一連の遺構を日本で初めて確認できた遺跡です。埴輪の生産は5世紀後半にC地区で始まり、ここで焼かれた埴輪は市内最大規模を誇る川子塚古墳に立てられたと推測されます。6世紀には、A・B・D地区の窯で埴輪が生産され、市内の笠谷古墳群や銚の宮古墳群に立てられたと考えられます。上の写真の馬形埴輪は、窯で焼かれた後、古墳には運ばれず残されていたものです。馬の埴輪は、遺跡発見のきっかけとなったものです。



大沼経塚群では、2基の経塚が調査されました。上の写真は、第2号経塚から出土した金銅製の経筒です。筒の側面には、天文10(1541)年の銘があります。中には、経文が納められていました。



向野A遺跡陥穴

向野A遺跡粘土採掘坑

向野遺跡群とは、当概地区の区画整理事業に伴い発掘調査が実施された8つの遺跡の総称です。発掘調査は、1990年から2004年まで段階的に実施されました。調査の結果、旧石器時代の石器や縄文時代草創期の陥穴、弥生時代の粘土採掘坑、古墳時代の馬渡埴輪製作遺跡と同じ時期の住居跡、近世の溝跡等がみつっています。

約800年前

平安時代



阿字ヶ浦

ひたちなか市の遺跡7 (勝田三)

勝田三中学区には、現在、53の遺跡がみつかっています。この中には、古墳に立てる埴輪を製作した馬渡埴輪製作跡や、古代の瓦を製作した原の寺瓦窯跡、鉄を生産した後谷津遺跡、中世の塩づくりをした長砂渚遺跡があります。また、中世の城跡の多良崎城跡やお経を納めた大沼経塚もあり、他の学区にはない遺跡が存在する地域です。

遺跡の発掘調査は、2010年までに54回実施されています。1965年から21回調査が実施された馬渡埴輪製作遺跡では、窯跡19基、住居跡2基、工房跡12基、粘土を採掘した跡25ヶ所以上が確認されています。当遺跡は1969年に国の史跡に指定されました。1976年から4回調査が実施された原の寺瓦窯跡では、古代の窯跡2基、工房跡5基等がみつかっています。上記の馬渡埴輪製作遺跡と原の寺瓦窯跡は、勝田第三中学校の生徒が埴輪や瓦をみつけたことがきっかけで、その存在が判明した遺跡です。

2010年までに発掘調査された住居跡の数
10基

2010年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

前渡小地区：原山遺跡、奥山瓦窯跡、長砂久保遺跡、原の寺瓦窯跡、大沼経塚、長砂渚遺跡、長砂西原遺跡、馬渡西板宮遺跡、馬渡埴輪製作遺跡、向野遺跡群(馬渡遺跡、向野A遺跡、向野B遺跡、向野C遺跡、向野D遺跡、向野E遺跡、西谷津遺跡、西谷津北遺跡)、後谷津遺跡、馬渡中宿西遺跡、本郷東遺跡



多良崎城跡は鎌倉時代末頃に築造された城と考えられています。



原の寺瓦窯跡は、奈良・平安時代に役所等の建物の屋根瓦を生産した遺跡です。ここで作られた瓦は、水戸市の台渡里遺跡群等に運ばれたことがわかっています。この遺跡の瓦の特徴として、「瓦作部」や「岡田」等の文字が刻まれた瓦が多数出土しています。

後谷津遺跡は、1988年に発掘調査が行われた奈良時代の製鉄遺跡です。ここで生産された鉄は、水戸市の台渡里遺跡群等で釘などに加工され使用されていたと考えられます。



向野A遺跡からは、土偶が出土しました。土偶は下部を欠損しており、乳房と思われる突起2つがみられるだけのシンプルな形をしています。これは縄文時代早期の時期のもので、日本で最古の土偶の一つです。



昭和三七年、茨城県教育委員会は全県の遺跡の分布調査を実施し、その結果を集約して『茨城県遺跡地名表』を刊行することになった。その編集作業を県教育委員会社会教育課の成瀬孟男課長から依頼された。授業の関係で無理があると言う事で辞退することとして県教育委員会に成瀬課長を訪ねた。すると成瀬課長は「定時制にまわれば時間がとれるのではないか。そのことも検討してほしい」と言う事であった。二年位ならそれもいいかと言う事で定時制を兼務することにし、週二日ほどの定時勤務の日の午前中を整理作業にあてることにした。場所は県立図書館二階にあった県立美術館準備室で仕事に取り掛かった。そこに川上博義氏がおられた。

昭和三九年の秋に県史編纂室が一階に開設され、佐藤次男氏が赴任してきた。時々、県史編纂室に立ち寄り佐藤氏と雑談を交わすこともあった。地名表の整理作業は難航した。遺跡カードの点検、添付されている地図を国土地理院の地形図に落とす作業が中心であるが、調査員が添付した地図は手書きもしくはガリ版印刷がほとんどであったから正確に地形図に落とせない。編集予算はゼロ、文房具を購入することもできない状態であった。

県史編纂の話は川上氏や遺跡カード整理作業の後、良く訪れていた天恩ビル専務の滝田宏氏から聞いていた。当時の委員は斎藤忠、山内清男、高井悌三郎、大塚初重、志田諄一、滝田宏、

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第6回 茨城県史編纂事業が始まった



左から川上博義、藤本弥城、山内清男、滝田宏の各氏（1969年 藤本武氏撮影）



川崎 純徳

大森信英、川上博義の各氏であった。間もなく山内氏が辞任され、滝田氏もやめられた。代わって佐藤達夫氏と私が委員になることになった。その時滝田氏から山内先生が辞任された理由をお聞きした。堂々巡りでいささかも前進しない県史の編纂に嫌気がさしたとの事であった。山内先生は東大退官後には成城大学で教鞭をとられていたが、成城大学にも何回かお訪ねした。先生は時々、那珂湊の藤本弥城氏宅に来られていた。そんな時には滝田、川上氏らも駆けつけていた。その話は滝田、川上両氏を通じてうかがった。最先端の考古学情報であった。東大、成城大と山内先生にはしばしば尋ねて教えを乞うた。山内研究室では緊張の連続であったが疑問については報告書などを取り出してご教授くださった。山方の石器の情報も把握しておられ、お聞きした時には旧石器ではなく無土器の古い方と覚えておられたようであった。

県史編纂委員になっても考古資料の収集、資料化などが主な仕事と心得ていたからひたすら県内を飛び回って実測や写真撮影等を行い、資料を部会の会議に提供していた。佐藤先生の調査にも顔を出した。大串貝塚や花輪台貝塚、福田貝塚などの測量などである。県史の会合の後には佐藤先生に誘われて喫茶店によく行った。部会の会合では語られなかった話を聞くことが出来た。私の調査では赤浜遺跡、後野遺跡には滝田さんとお見えになったことがある。

遺跡を見つけた少年たち



安島 功

「先生、みつけた。これでしょ、ぬのめがわら。まだまだいっぱいあるよー。」

下校後であったか定かでないが、川又基平君と照沼君だったと思う。火照った顔に汗まみれの興奮状態で、職員室に飛び込んできた。それぞれの手には幾つかの土器片が握られていた。それは、確かに「布目瓦」であった。その時の印象、喜びは発見した両君も然ることながら、私自身も興奮気味。「やったなアー。」と大声になった。居合せた先生方も「何だ、何だ、何を…」と寄ってきた。それが「原の寺瓦窯跡」の発見につながっていったのであった。

当時、私は那珂湊中学校（旧那珂湊市）より勝田第三中学校（旧勝田市）に、転任して来たばかり。赴任して最初に入った玄関に大きな戸棚があり、ガラス戸越しに多数の展示品。その中に、一際目立つ馬の埴輪。いくつかの土器や石器のあるのが目に写った。後日、改めて土器・

石器類を見ると、名称も、誰が・いつ・どこで見付けたのか分らない。馬の埴輪以外は、誰も知らない。幸い、当時の勝田市教育委員会をはじめ考古学や歴史関係の担当の方々と連絡を取り、これ等について指導や協力をいただき、少しずつ目安がついてきた。授業では、土器や石器を社会科学歴史学習の補助教材資料として活用する。その一つに「布目瓦」があった。

「これは、ぬのめ瓦。よく見ると今の瓦とは違うよネ。大変珍らしく貴重なもので、現在市内では、まだ見つかつてはいない。もしこれが見つかれば、大発見になるかも知らない。それは、今学習している古代の道路が、勝田付近のどのあたりを通っていたのかを知る手がかりとなる、駅家跡が見付かるかもしれないよ。」

それが原の寺遺跡の発見につながり、改めて実物教材の力を認識する。

那珂湊在任中の体験を思い出しながら、生徒達には、「土器、石器類の表面採集には、畑なら境木や、他の畑との境界である畦、そこには畑で掘り起こした邪魔ものである石・土器類が寄せ集められている。畑の縁の土手面が低地に崩れ落ちる崖もポイントだ。畑や整地跡では雨の後、雨によって遺物が洗われて見つけやすいからね。持ち物では、スコップ、メジャー、方位を示す磁石盤、野帳、物入れなどかな。注意しなければならぬのは、この三中地区は毒蛇（マムシ）が多いそうだ。土手崩れの草藪には大ス

ズメバチの巣があるかも」。更に、「田畑の持主に許しを得ることを含め礼儀作法を忘れない、荒らさない。そして、結果は、先生方などに相談することがよい。」等々を話す。

これがきっかけになったのか。生徒たちの若く旺盛な順応力もたらしたものであろうか。展示されていた中の安山岩質のナイフ形石器を調べている過程で、これは長砂地区の卒業生が新地当りの畑で拾ったようだということがおぼろげながらわかってきた頃。クラブの生徒たちあるいは綿引君であったか記憶は明確ではないが、長砂の原山トウメン牧場で数個の頁岩質の石器らしいものを見つけてきた。早速その生徒の案内で現地に行くが、草地の所々に黒土と赤土の地面が露出している付近を見廻しても何も見当たらない。後日、市教育委員会から調査に来訪、改めて調査しなければ、とのことであった。これが「原山遺跡」の発掘調査へとつながることになる。

また、このことに前後して今度は、学校より南西方向約二キロメートル余りの本郷台で、栗田茂樹君が、「友達と遊んでいて見付けた。」と、いつ、頁岩質の立派な石刃を持参した。そこは、東方に本郷台団地が作られている「後野」と呼ばれ、将来小学校建設予定地と聞いていた場所でも適していた。周囲の一部にくぬぎ、楢などに松が混じった小さな自然林があり、その近くの赤土付近で見付けたという当りを、スコップで削つ

てみたが、何も出てこない。後日に、発掘調査の手伝いでわかったのであるが、栗田君たちと赤土を削った中に小さな石器の破片らしいものがあったことを思い出した。そこが「後野遺跡」だったのである。



後野遺跡の石器

梅雨明けの晴れた暑い日の午後。足もとに気を配りながら、赤松まじりの雑木林をゆつくりと歩いていた。時々顔を上げ方向を確かめては木につかまりながら、一步また一步と。ところが、次の木をつかんだその途端、柔らかくヌルツとした何ともいえない異様な感じ。顔を上げたのが先か、一瞬飛び下った。つかんだその物も飛び跳ね、バサツと落ちた音。それを見てまたびつくり、何と太くナガイ蛇の青大将ではないか。背筋が、ゾーツとして、しばらく立止ってしまった。

これは、弥生住宅団地の西側道路に車を置き、近くにある埴輪製作遺跡の周辺地形を見ながら、社会科学学習の野外観察用のルートマップを作る調査をするついでのことである。この遺跡は、当時大変珍しい遺跡であることを聞き、発掘調

査の折に幾度か見学したことがあった。埴輪を焼いた登り窯をはじめ、工房跡、粘土採掘跡など、いろいろなものが次々と見つかった。しかも、それらが次第に学術的にも、重要な遺跡であるということが分ってきたのだが。この発見につながったのは、勝田三中の卒業生。在校中の頃、山百合掘りで偶然に馬の埴輪を見つけたのがきっかけとなり、発掘され「国指定史跡、馬渡埴輪製作遺跡」となったのである。

その遺跡周辺の地形などを調査し、あわよくば埴輪片が見つかるかもしれない、なんて考えながら、足元に気をとられて大蛇との遭遇と相成った次第であった。気を取り直して、今度は、他の邪魔ものにも気を配り、恐る恐る谷津にかかる土手際を進む。「こんな所で見つけたんだろうなア」と思いながら。山百合の花には少し早いせいか見当らない。か細いのが少しばかり。もちろん埴輪片どころか、土器・石器片すら見つけることはできなかった。「よし見つけよう。」と欲張って闇雲に探しても見つかるものではない。「今日は、野外観察用のルートマップ作りの調査確認だから、遺物を見つけない来たのではないから。」などと気休め気分で見上げた。

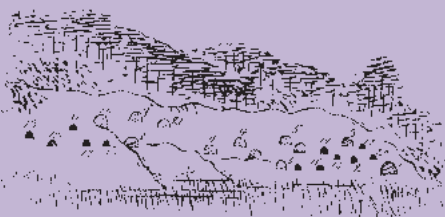
途中、ふと、馬の埴輪を見付けた当時の生徒の気持、動向を思い起こし、偶然の発見とはいえども「やっぱり大発見だ。偉い。やったなア。」と思った。

十五郎穴の昔話

その一

十五郎穴横穴墓群についての記述は、古くは江戸時代の一七六三（宝暦一三）年に久方蘭溪が著した『松岡郡鑑』や、一八〇七（文化四）年頃に編纂された小宮山楓軒の『水府志料』があります。『水府志料』は水戸藩士の小宮山が水戸領全域の地誌をまとめた書物で、十五郎穴は「十郎岩屋」と題して紹介されています。小宮山はその後十五郎穴について「中根村石窟」を著し、その中で十五郎穴を墓と考え、横穴墓の規模や被葬者像等にも言及しています。「横穴」が「墓」であるということが考古学界で認められるのは一八九七（明治三〇）年以降のことなので、江戸時代にすでに墓と考察していた小宮山には、その見識の高さが窺えます。

十五郎穴については、その後も栗田寛の『事蹟雑纂』や、大内義比の「常陸國那珂郡中根村に於ける横穴」『考古界』第六篇第一号等の江戸から明治時代の文献に記述が見られます。これらの文献から、十五郎穴が昔から注目されていた遺跡であることがわかります。（稲田健一）



『考古界』に掲載された十五郎穴

み た ん だ し い づ か せ き ぼ う
三反田蜆塚貝塚の大型石棒

鈴木 素行



想定される完形品の大きさと形

「大山石」と名付けた石材の大型石棒の分布を調査していたところ、センターに所蔵されている資料の中にも、これを見出しました。三反田蜆塚貝塚から出土していた石器です。

1 はじめに

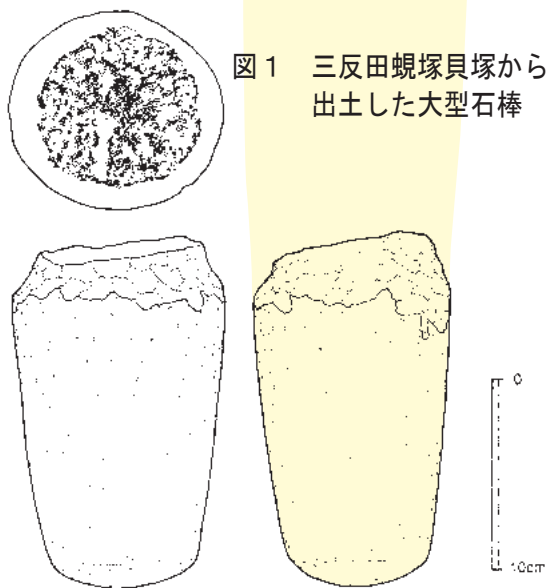
ひたちなか市埋蔵文化財調査センターには、「藤本弥城先史資料」として市内の三反田蜆塚貝塚の遺物も所蔵されており、いくつかは標本陳列室に展示されている。ここに紹介するのは、藤本弥城氏により「石杵様磨製石器」という名称で報告された石器である。藤本氏は、この石器を「石棒」とは区別して記載した。

本稿では、この石器を「大型石棒」の破片として再報告する。表面に残された痕跡からは大型石棒が破片化した経緯、石材の特徴からは大型石棒を供給した地域を推定しておきたい。

2 大型石棒に残された痕跡

大型石棒(図1)は、現状の計測値で長さ一八・六cm、二八八四・三g。略円柱状を呈し、直径の最大部は一〇・四一一・一cm、最小部は七・六一一・一cmである。やや細くなつて凸面が作出された下方が単頭の石棒の基部に相当し、側面と下面は平滑に研磨されている。上面も研磨されているが、研磨が及ばない部分もあり、全体を平滑にするための研磨ではない。上面の周囲にのみ集中的な剥離の痕跡が残されている。この剥離は側面を破壊するが、上面は破壊していない。剥離の痕跡は、樹木を斧で伐採した際に形成される痕跡に似ており、敲打による剥離を繰り返して溝状に抉った部分から大型石棒が切断されたと推定される。同じような切断の痕跡は、栃木県寺野東遺跡の大型石棒(図3-1)などにも観察されている。その後、切断面であった上面に研磨が加えられた。この研磨について

図1 三反田蜆塚貝塚から出土した大型石棒



は、砥石としての使用痕と考える。同じような使用の痕跡は、千葉県金桶台遺跡の大型石棒(図3-2)などにも観察されている。研ぎ面を上にしては安定しない形状に見えることから、下部を埋めて使用されたことが想定される。

側面の研磨を製作痕、上面の研磨を使用痕と捉えることにより、三反田蜆塚貝塚の「石杵様磨製石器」は、大型石棒の破片を素材とした砥石と考えられた。その転用のための切断の痕跡を明瞭に残した事例として評価される。大型石棒としての本来の長さは、胴部の太さから推定して九〇cmを超えるであろう。側面の一部に被熱の黒化が見られることは、大型石棒に対して「燃焼」という行為があったことを窺わせる。転用は、大型石棒としての役割を終えた後のことであつた。

図2 「大山石」
大型石棒の流通



3 大型石棒を供給した地域

大型石棒の石材は「安山岩」と報告されているが、白色系の色調で比較的軟質の岩石であり、石英粒を多量に含む特徴は、「石英斑岩（分類によっては流紋岩）」と記載された群馬県恩賀（西野牧小山平）遺跡の石材に共通する。

恩賀遺跡は、群馬県でも長野県との県境に位置し、大山という山の麓を供給源とする石材を利用した大型石棒の製作址が調査されている。遺跡の時期は縄文時代中期後葉。この石材を「大山石」と呼び、「大山石」で製作された大型石棒の分布を追跡してみると、これが関東地方をほぼ網羅するような広い範囲に分布すること（図

2）、中期後葉だけでなく後期前葉まで時期幅があることが明らかになってきた。三反田蜆塚貝塚の石器は、「大山石」の大型石棒が茨城県域の海岸部にも流通したことを示す事例である。

特徴的な石材であることから、藤本氏は「石杵磨製石器」が三反田蜆塚貝塚からもう一点、市内の上の内貝塚から一点出土していることにも言及し、これが「中期後葉の遺跡にある」ことを指摘している。直径の最大部は、上の内貝塚が一一・五cmでほぼ同じ大きさ、三反田蜆塚貝塚のもう一点が八・五cmと一回り小さい。これらを観察してみると、ともに「大山石」を素材とする大型石棒の基部破片であった。茨城県域における「大山石」の大型石棒の分布は調査を始めたばかりで、確認できた資料は未だ少ないものの、稀ではないことが予想されるのである。

4 おわりに

大山の山麓から三反田蜆塚貝塚までは、直線距離でも一八〇kmを超える。長さが九〇cmを超える大型石棒の重量は、二〇kgを優に上回る。「大山石」の大型石棒の価値の大きさは、その運ばれた距離と重量からも看取される。大型石棒が本来の役割を終えるに際しては「燃焼」という行為と、これに伴う「破碎」という現象があったと推定されている。破碎された破片がそのまま、あるいは加工されて別の道具に転用されることは、縄文時代にはごく普通に行われていて、大型石棒についても例外ではなかったと考えなければならぬであろう。

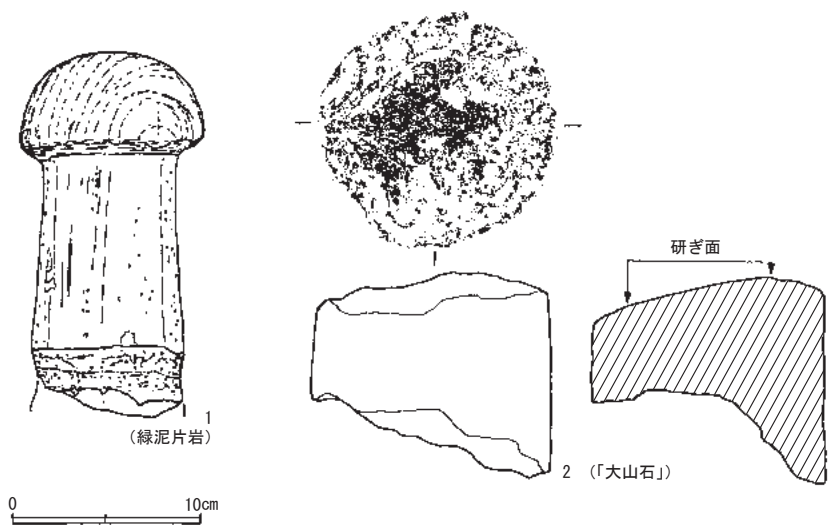


図3 参考資料（1：寺野東遺跡 [江原 2001]，2：金桶台遺跡）

参考文献 江原英二〇〇一『寺野東遺跡Ⅲ』（第250集）
栃木県教育委員会／鈴木素行二〇〇七『石棒』『縄文時代の考古学』第二巻 株式会社同成社／鈴木素行二〇一〇「大形石棒が埋まるまで」『縄文人の石神』國學院大學学術資料館／沼沢豊一九七四『松戸市金桶台遺跡』房総考古資料刊行会／藤本弥城一九七七『那珂川下流の石器時代研究Ⅰ』／藤本弥城一九八〇『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』

やなぎさわだいたぼう どかん
柳沢大田房貝塚出土の土冠

横倉 要次



(実物大)

土冠はその原型となった石冠とともに、男女両性の象徴を具現化した表現がされたものと捉えられ、豊穰や繁栄、誕生と再生、集団の統合などの祈りと願いを込めた呪術的・儀器的な用具と考えられます。小さな破片ですが、茨城県内では3例目となる希少な土製品の一部であり、縄文時代晩期の精神生活を知る手掛かりとなる興味深い資料と言えます。

1 柳沢大田房貝塚の調査

柳沢大田房貝塚は、市南部に所在する。那珂川と中丸川に挟まれ細長くのびた三反田丘陵の先端付近に位置し、標高二〇〜二五mの台地上に立地する。現在、大部分は住宅団地になっているが、宅地に囲まれた畑作地の一角に遺跡が残る。

一九七二・一九七三（昭和四六・四七）年、宅地造成工事に伴い藤本弥城氏らによって発掘調査が実施された。調査は、四か所の地点を対象に行われ、住居跡・再葬墓を含む小ピット・小貝塚等が確認された（藤本一九七七）。出土した遺物は各時代にわたるが、全地点で後・晩期の縄文土器が出土し、これらの土器群を通して、当時の東北地方と関東地方における文化交流の様相が明らかになった。

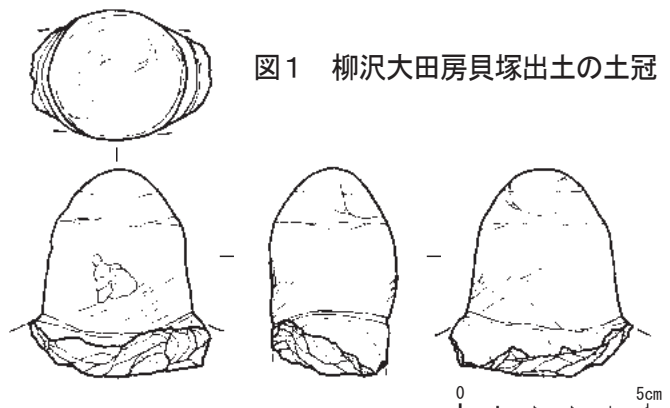
また、第Ⅱ・Ⅲ地点では、多量の晩期土器とともに、石器類や骨角器類、貝類や骨角等の自然遺物が検出され、漁労と狩猟を中心とした生業の実態が捉えられた。さらに、土偶・人面土版・三角埴などの土製品、石棒・石剣・独鈷石・岩版などの石製品、線刻を有する土器や礫など多彩な遺物も出土しており、祭祀や儀礼等の精神文化の一端を窺うことができる貝塚である。

2 柳沢大田房貝塚出土の土冠

当センターに寄贈され、展示公開がなされている「藤本弥城先史資料」の一つである。土冠は、石冠形土製品または冠状土製品とも呼ばれ、大きく頭部と基底部によって構成される。紹介する土冠は、頭部から頸部にかけての小破片で、基底部を欠損している。頭頂部付近は、指頭に

柳沢大田房貝塚の現況

図1 柳沢大田房貝塚出土の土冠



よるナデ調整を周回させ、形状を整えている。頭部下半には、整形時に付いたと考えられる条線状の爪圧痕が確認できる。頸部には、細く浅い沈線を巡らし、三角形状に広がると推定される基底部と区画している。

胎土には、砂粒を少量含む。焼成は普通で、色調は頭頂部の片面のみが淡褐色をしているが、全体的には黒褐色を呈する。計測値は、現存高五・六cm、現存長四・九cm、頭部最大厚三・三cmで、現存重量は七九・一gである。

所属時期は、出土状況や共伴する遺物等が明確でないため断定できないが、他の多様な土製品・石製品等と同じく、縄文時代晩期に位置付けられるものであろう。

3 土冠の出土分布と形態分類

古くから土冠の原型とされる石冠を中心、名称や用途、集成と分布の把握、形態の分類等の研究がなされてきた。これまでの集成結果に拠れば、石冠分布の中心は、中部・北陸地方か

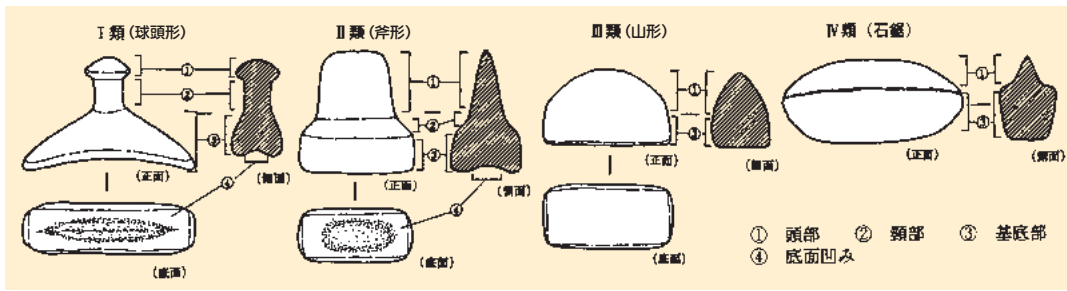


図2 石冠の形態分類と呼称 (文献④より加筆引用)

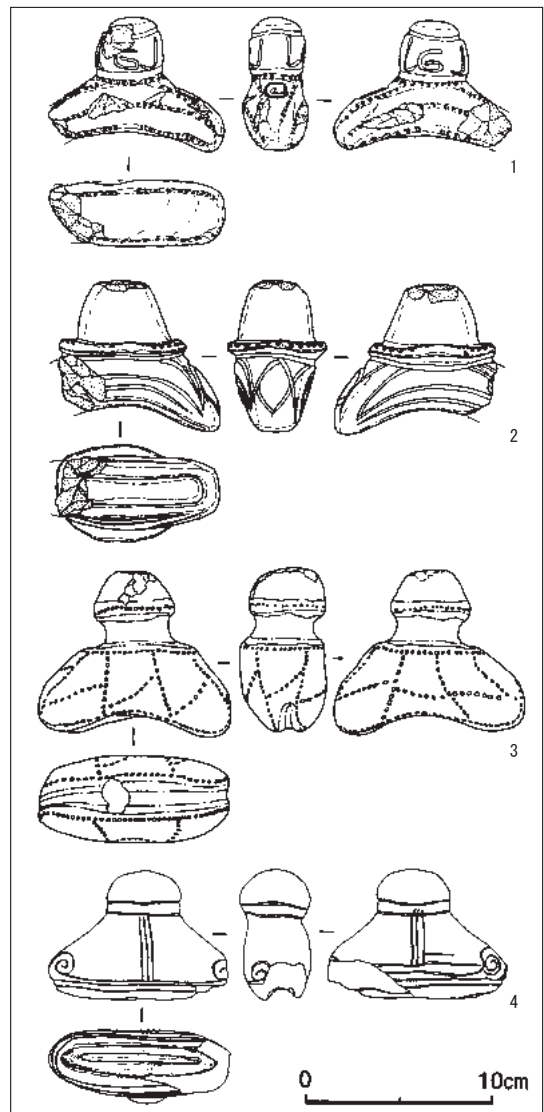
ら東北地方の日本海側とされ、土冠の分布は、石冠分布の周辺及び希薄地域と捉えられている。「中島一九八三」。関東地方各県からの出土例は決して多くはなく、県内では常陸太田市幡台遺跡と常陸大宮市小野天神前遺跡で出土例が見られる。当地方は数量的には少ないが、石冠と土冠が散在して分布する地域であることは確実にある。

形態の分類に関しては、石冠の頭部に注目すると、図2の球頭形・斧形・山形・石盤形に大別される。「中島一九八三」。紹介した土冠は、球頭形に該当するものであるが、頭部は沈線による区画のみで、球頭形石冠に多く見られる棒状の形態、あるいは括弧の表現を採らない。基底部の形態は不明であるが、図3に示したように、他遺跡出土例の多くが、底面は彎曲して弧状を呈し、

底面中央には長楕円形あるいは溝状の凹みを有する。製作意図には、共通性を見出すことができる。このような石冠と土冠の分布傾向や、形態や文様に見られる共通点と相違点は、当時の社会背景や文化の特質を反映したものと考えられよう。

4 土冠に込めた祈りと願い

機能と用途についても、石冠を中心に出土状況や民族事例等をもとに、多様な論が展開されてきた。近年では、出土遺構の検討と使用痕の分析から、石冠の形態に応じた機能の分化も指摘されている。特に、球頭形に分類される石冠は、精緻な製品が目立ち文様が施される傾向が強いことから、土冠の多くは、この形態を模倣したと考えられる。球頭形の石冠は、土冠も含めて祭祀または儀礼用と考えるのが妥当であろう。また、球頭形の石冠、土冠の頭部形態と基底



1 幡台遺跡(常陸太田市) 2 小野天神前遺跡(常陸大宮市)
3 御霊前遺跡(栃木県) 4 船戸貝塚(千葉県)
(文献②・⑤・⑥より一部改変・省略して引用)

図3 茨城県と近県出土の土冠

部底面の凹みを、男女両性の象徴を具現化した表現と捉え、男女交合を含めた性に関する呪術的・儀器的な用具とする説「能登一九八二」も説得力を持つようである。具体的な用途や使用方法は、不明であるが、この小さな土製品には、豊穡や繁栄・誕生と再生、あるいは集団の団結や統合などへの深い祈りと大きな願いが込められたものと想像したい。

参考文献 ①藤本弥城一九七七『那珂川下流の石器時代研究Ⅰ』②堀越正行一九七九「船戸貝塚と土偶・石冠形土製品」『史館』一一史館同人③能登健一九八一「信仰儀礼にかかわる遺物(Ⅰ)」『神道考古学講座』一雄山閣④中島栄一九八三「石冠・土冠」『縄文文化の研究』九雄山閣⑤後藤信祐二〇〇一「御霊前遺跡」Ⅱ栃木県教育委員会⑥横倉要次二〇〇八「茨城県北部出土の土冠二題」『婆良岐考古』三〇婆良岐考古同人会

埋文センターの日々

2010 後期

10月

「銚子市歴史民俗研究会見学／郷土歴史研究会／19茨城放送⑦「砂に埋もれた伝説〜佐藤次男先生〜」／20東京ウオーキングクラブ・サザンカ見学／22那珂市中央公民館見学／中根小学校2年生校外学習／27三反田新堀遺跡試掘調査開始／宿ノ内遺跡試掘調査開始／31ふるさと考古学⑥「ガラスの考古学」（講師・勝田友李氏）」



『埋文だより』第33号発行

11月

3第3回記録集『弥生時代の墓制と社会』発行／3-7虎塚古墳公開／4三反田新堀遺跡試掘調査終了／宿ノ内遺跡試掘調査終了／一中コミセン見学

4木曜ウオーキング会見学



4田彦小学校3年生社会科見学



田彦公民館見学／6潮来市移動歴史講座見学／7ふるさと考古学⑦「壁面の考古学」（講師・堀江武史氏）／11-12佐野中学校2年生職場体験／12-14虎塚古墳公開／13東京都万葉の会見学／14ふるさと探勝会見学／東京サイバー大学見学／15虎塚古墳閉塞作業／16高野小学校6年生社会科見学（写真）／15五郎穴横穴墓群試掘調査開始／17新庄ふるさと研究会見学／20

ふるさと考古学⑧「フィールド探検」（講師・矢野徳也氏）」



21ボーイスカウト歩く会見学／26中根小学校1年生どんぐり拾い／27郷土歴史研究会／28ふるさと考古学⑨「骨の考古学」（講師・小宮孟氏）」



12月

1上高津貝塚ふるさと歴史の広場企画展「土浦の遺跡15」より資料返却【武田西堀遺跡発掘関連資料】／郷土歴史研究会／2山梨県立考古博物館企画展「発掘された女性の



6 ソメイヨシノ

虎塚古墳 春 壁画公開、四月 頃 実施
、虎塚古墳周辺 桜 満開 時期 よ 重
。 桜 「 (染井吉野) 」。 雑種 。 名
前、江戸末期 明治初期、東京 染井村(現在 豊島区) 「吉野桜」 売 出 、藤野奇命
一九 年(明治三年) 『日本園芸雑誌』 「染井吉野」 命名 由来 。
春 虎塚古墳見学 際、満開 桜下 弁当 広 (稲田健一) よ。



系譜」より資料返却【乳飲み子埴輪ほか】／5ふるさと考古学⑫「す」く楽しい考古学」(講師・さかいひろこ氏)／ワンケースミュージアム18「佐藤次男考古学資料Ⅳ」終了／15屋敷内遺跡試掘調査／22火ノ見京子氏寄贈資料受入【津田黒袴地内採集土師器ほか】／23茨城大学文学部校外授業

1月
1イノシシ骨格標本完成／16雪



18茨城放送⑩「後谷津製鉄遺跡について」／21十五郎穴横穴墓群試掘調査終了



山梨県立博物館企画展「甲斐源氏列島を駆ける武士団」より資料返却【武田遺跡群出土墨書土器ほか】／22ワンケースミュージアム19「いただ

きもの。 2007-2010年度の寄贈資料

開始／23第8回企画展「古代茨城の鉄生産」開始／26-27勝田第三中学校2年生職場体験

2月
1津田若宮遺跡試掘調査／3黒澤春彦氏(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)資料閲覧【武田遺跡群出土炭化種実】／8-10岡田遺跡試掘調査



12公開講座①「製鉄遺跡研究の現状について」(講師・穴澤義功氏)／18郷土歴史研究会／19公開講座②「近江国の製鉄遺跡―関東の製鉄遺跡を考える前提として―」(講師・大道和人氏)／26公開講座③「茨城の古代製鉄遺跡」(講師・佐々木義則)



／大森昇氏寄贈資料受入【鳥ノ原遺跡出土縄文土器片】

3月

1渡辺明氏寄贈資料受入【高野城内採集陶器ほか】／5公開講座④「鉄製品の分析からみた古代鉄生産」(講師・関博充氏)／常陸風土記を歩く会見学／8清水久男氏(大田区立郷土博物館)資料借用更新【東中根遺跡炭化米】／上高津貝塚ふるさと歴史の広場企画展「土浦の遺跡16 ムラの風景 ぐらしの足跡―霞ヶ浦周辺の古墳時代集落―」へ資料貸出【武田遺跡群出土炭化種実】／9-11・23東大島地内試掘調査／11東北関東大震災発生／12-31休館／15電気復旧

15平成22年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書」発行／23水道復旧確認／29茨城放送⑫「地震と考古学」／31埋文だより」第34号発行

入館者状況 (2010.10.1～2011.3.31)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	27	187	5 (1)	115 (20)	302	
11月	25	1043	18 (6)	593(340)	1636	
12月	23	127	4 (0)	86 (0)	213	
1月	23	131	3 (2)	16 (11)	147	
2月	24	128	5 (5)	127 (0)	255	
3月	10	50	2 (0)	46 (0)	96	
合計	132	1666	37 (12)	983 (371)	2649	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の 笑う埴輪

唱歌「ふるさと」の歌詞「うさぎ追いし」を「うさぎ美味しい」と思い込んでいた、という話はよく聞く。聴いた歌詞を誤解していたということのだが、では何故ウサギを追った掛けたのだろう。歌詞は「こぶな釣りし」と続く。釣った魚はキャッチ・アンド・リリースで逃がしたのだろうか、観賞のために飼ったのだろうか。おそらくは食べただろう。ならば、ウサギも狩るために追い掛けたのではないか。実は、山での狩猟と川での漁労が対句となった歌詞なのであって、「うさぎ美味しい」と直感的に聴き取ることが、あながち誤りではない、などと思いを巡らしていたら、年が明けて卯年を迎えた。

縄文時代にはもちろんノウサギも食べていた。市内の三反田蜆塚貝塚からもノウサギの下顎切歯、上腕骨、踵骨が検出されている。かなり前に、骨格標本を作るためにウサギを埋めたのだが、その場所がわからなくなってしまう。昨年度からは砂場を設けたので、このような失敗を繰り返すことはないだろう。後はウサギ待ち。まさか時折センターに姿を見せる灰色のノウサギを追い掛けるわけにもゆくまい。



2011.3.8

ひたちなか埋文だより 第34号

編集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

2011年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根 3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

